

受付番号

留学・研究計画書

| | |
|--|--------------------------|
| 氏名 福原 裕二 | 留学機関名 韓国高麗大学校日本研究センター |
| 留学先国名 大韓民国 | 留学期間 西暦 2011年4月～2012年3月 |
| 研究テーマ 韓国鬱陵島の近代とその発展的継承 | |
| 研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください) | |
| <p>【研究の目的】</p> <p>本研究課題は、申請者がこれまで日韓双方で網羅的に収集してきた史資料の実証的分析を基に、韓国で行う対面調査によって得られる知見を加味して、鬱陵島の近代水産業発展過程と韓国建国後のその技術的継承の実態を明らかにするものである。具体的には、近代の史的展開においては鬱陵島における言わば同じく移住民であった日本人と朝鮮人との「共生」の実態及び日本の水産技術の伝承過程と定着状況の解明、現代においては「日本という存在の去来」後に如何にして1970年代初頭までに水産業を柱として韓国でもっとも一人当たり所得の高い「例外的な離島」を形成することができたのかを明らかにすることを試みる。</p> <p>【研究の内容】</p> <p>第一に、開拓令発出(1882)に伴う朝鮮人の鬱陵島への移住開始から日本の朝鮮半島植民地統治終焉(1945)までの鬱陵島の史的展開を4つの時期(①移住端緒時期[1882-1900]、②水産漁業創始時期[1900-1910]、③水産漁業定着時期[1910-1920]、④水産漁業発展時期[1920-1945])に区分した上で、日本人・朝鮮人それぞれの初期移住の状況、水産漁業の創始時期及び創始に関わる漁法の伝達経路、農事から漁業中心の生業形態へと変転した契機・理由・発達史、人口・社会動態などの解明を試みる。第二に、植民地解放以降、韓国の建国を経て1970年代初頭に至るまでの時期の水産漁業の展開と施策、また「例外的な離島」形成を可能にした建国後の本土からの移住状況とセマウル運動・離島振興政策との関係について明らかにする。</p> <p>【研究の意義】</p> <p>いわゆる「竹島問題」を契機に、近世以来の日朝間における日本海上の結節点であった韓国鬱陵島が脚光を浴びて久しい。だが、その近現代の史的展開、とりわけ農事から漁業中心の生業形態へと変転した契機やこれに介在した日本からの移住民の存在について、また韓国建国後の鬱陵島がなぜか水産業を基盤に発展が可能であったのかについては明らかにされていない。本研究課題は、その存在が殆ど知られていない「鬱陵島友会」メンバーへの聞き取り調査を土台とした従来研究の成果を基礎に、独自に発掘してきた史資料の分析と鬱陵島開拓令期の移住者を祖父に持ち、自身も鬱陵島で生まれ育った崔憲植氏など10数人の韓国人鬱陵島在住者への聞き取り調査を十分に駆使して史実に迫る初めての実証研究として高い学術的な意義を持つものと予想する。また、日韓関係史研究において着実な学術的蓄積を重ねる韓国の研究機関で本研究課題を実施することで、かつ申請者が行ってきた4度の現地調査により信頼関係を築き、研究への支援を内諾された鬱陵郡庁の方々や鬱陵島郷土史家の方々の存在によって、韓国においても学術的かつ社会・地域的な知的還元ができるものと考え、ここに極めて高い価値を有するものと確信している。</p> | |

成果報告書

記入日 2012年 4月 20日

| | | |
|--|---------------|-------------------------|
| 氏名 福原 裕二 | 留学先国名 大韓民国 | 所属機関 韓国高麗大学校日本研究センター |
| 研究テーマ： 韓国鬱陵島の近代とその発展的継承 | | |
| 留学期間： 2011年 月～ 2012年 3月 | | |
| <p><研究成果の概要></p> <p>1945年8月末、5百人足らずの鬱陵島日本人社会は、日本への帰還準備に追われていた。だが、島の最有力者である島司の大竹作次郎は、解放直後の混乱の中で門外不出の状況に置かれていた。その上、道会議員を務めていた西野盛も留置所に留め置かれていた。こうした状況下でその他の有力者、すなわち学校組合管理者桑本邦太郎を中心に、公立尋常小学校長及び公立国民学校長、測候所長、無線局長など、民間人の有志が挙って対策にあたった。結局、日本へは11月に引き揚げることに決した。とはいえ、帰還に際して所有できる金銭は各自千円まで、搬出することのできる荷物は1個のみとされた。こうして1945年末には50年余り続いた鬱陵島における日本人社会の幕が下ろされることになった。</p> <p>その後の鬱陵島社会の消息を伝えるのは、ほぼ新聞記事のみである。そこでは絶食に喘ぐ鬱陵島の様子が伝えられている（例えば、『京郷新聞』1947年4月17日付）。しかし、1960年代後半には一転して漁業に活況を呈する絶海の孤島として知られるようになり、人口増加も見られる。さらに、1970年代初めには、韓国で最も一人当たり所得の高い「例外的な離島」となる。</p> <p>①移住端緒時期 [1882-1900]：そもそも鬱陵島は、15世紀初頭に倭寇対策を目的として朝鮮王朝により「空島」政策が敷かれた孤島であった。だが、明治初年以降に日本人がしばしば鬱陵島へ渡島したことを契機に、朝鮮王朝はその調査を行い、空島政策を翻して開拓令を発し（1882年6月）、内陸民の入居を進めた。当時入島した朝鮮人らは「山間ヲ開拓シ畠地ヲ作りテ農耕ヲ業ト」した。その多くが内陸の山間部からの移住者だったからである。</p> <p>一方、明治後期に至るまで、「磯竹島」「竹嶋」として知られた鬱陵島へは、山陰地方出身者を中心に渡航する人びとがいた。明治初年頃には日本人が鬱陵島周辺海域で烏賊漁を行っていた事実を史料により確認することができるものの、当時の日本人渡航者の主な目的は伐木であった。ただし、これら日本人は渡航の時期を選び滞在した一時居留民であった。日本人が鬱陵島に定住し始めるのは、いくつかの資料を重ね合わせると、1890年代中頃から新たに伐木と製材を目的に渡島してきた人びとである。</p> <p>②水産漁業創始時期 [1900-10]：日本人がその後の鬱陵島漁業の主流となる烏賊漁を始めたのは、1903年のことである。1906年にはこれに倣い朝鮮人が烏賊漁を始めたとの記録がある。しかし、当時の鬱陵島漁業は日本人の独占であった。ただし、海苔と若布の採取は、朝鮮人の貴重な財源であることから、</p> | | |

日本人はこれに着手しなかった。このように、1900年代初頭には日本人社会を束ねる日商組合会、朝鮮人組織である商務所が整備され、両者の経済的縄張り、円滑な商取引の妨害行為などが取り締まられた。

③水産漁業定着時期 [1910-20] : 上述の過程までは、鬱陵島在住日本人は言わば朝鮮王朝・大韓帝国の版図の地に無許可に入居した人びとであった。残念なことに、日本の朝鮮半島植民地化が鬱陵島社会に如何なる影響を及ぼしたのかについての具体的な資料は未発見であるが、これを契機に日本人人口が千人を突破し、日本人会が学校組合に改編されるなど、日本人の自治が深まっていったことは間違いない。ちなみに、その後1914年に日本人人口は2千人に膨れあがるものの、これを上限に1920年には千人を大きく割り込み、1920年代中頃にはさらに減少し、5百人前後の人口で推移していく。

また、この時期の各種漁業統計も未獲得であるが、貨客船である汽船隠岐丸(鳥取県境-鬱陵島間;1910年)、迎日丸(釜山-鬱陵島間1912年)の定期就航、鬱陵島漁業協同組合の創立認可(1914年)などから推測するに、日本人が創始した漁業は順調にその地へ定着していったと考えられる。

④水産漁業発展時期 [1920-45] : 朝鮮半島本土からは最も離れた島嶼の一つである鬱陵島は、それゆえ総督府の行政が緩慢に伝播した。法院(裁判所)の開設や行政の長たる島司が警察署長を兼任するのは1916年のことである。また、朝鮮の経済支配を目論み、植民地化の比較的早い段階で全国各地に創設された金融組合・農業協同組合も、それが鬱陵島に創設されたのは1924年のことである。さらに、『昭和八年 島行政一斑 鬱陵島』の「島事務分担表」(1932年現在)によれば、島司の下に島属が5名(うち主任3名)、技手が2名、その下の雇員が5名の総勢13名によって島の行政が担われていたことが明らかだが、そのうちの島属4名(うち主任2名)、雇員の2名が朝鮮人である。つまり、鬱陵島では、植民地期に総督府の支配が緩やかであっただけでなく、朝鮮人の島政への進出も確立されていたと考えられる。この日本人と朝鮮人との「共生」関係は島政のみに止まらない。

当初、日本人の独占であった漁業も鬱陵島にそれが根付くに従って、朝鮮人の進出を見た。1937年には、漁業に従事する日本人戸数35戸、人口38人に対し、朝鮮人は565戸、622人に上る(ちなみに、1910年頃には漁業者の76%が日本人との記録がある)。鬱陵島の漁業はその9割以上が朝鮮人によって担われる産業へと変貌した。鬱陵島において漁業は、1900年代の中頃から植民地朝鮮期を通じて、主要な産業であり続け、解放後一時衰退するものの、これを足掛かりに「例外的な離島」を形成した。この時期の朝鮮人の漁業への大量進出が、日本人が持ち込んだ漁業の技術的継承を可能にしたのである。

⑤植民地解放以後 [1945-1970初] : 元鬱陵島漁業者(韓国人)に対する聞き取り調査によれば、解放後数年は岩肌に鯛烏賊を並べ、乾燥させて鯛に加工していたという。ところが、それでは能率が悪く、戦地から引き揚げてきた元漁業従事者(韓国人)に相談したところ、「日本人はこのようにして竹串に鯛烏賊を刺し乾燥させていた」と聞き、それ以降日本式鯛加工技術が鬱陵島の主流になったという。この日本式鯛加工技術が隠岐の島方式であることは、国家記録院に残されている1950年代の鬱陵島の様子を撮影した写真で確認することができる。なお、鬱陵島に移住した日本人のうち、最も多数を占めるのが島根県隠岐の島の人びとである。彼らは元来漁業を生業としていた。

もちろん、「日本人の存在」が強烈に影響を及ぼした漁業のみで、その後の鬱陵島の発展が説明できるわけではない。そこには、朴正熙大統領の意志が大きく介在していた。朴正熙は彼が未だ最高会議議長であった1962年10月に鬱陵島を訪問している。その後すぐに彼は経済企画院に命じ、「鬱陵島総合開発」

の計画書を策定させた（同年11月）。この総合開発は早くも翌年より着手された。そこでの重要建設事業は各港湾の補修と修築、水産物処理加工総合施設、水力発電所建設、上水道工事、一周道路の改修・補修など、島発展の基礎的インフラの整備であるとされ、6か年でほぼ事業が完成した。この事業に伴い、鬱陵島の人口は2万人を突破し（解放時の朝鮮人人口は約14,000人）、その後3万人足らずまで増加することになる。そのみならず、1963年を基点に各種経済数値が上昇した。こうして、鬱陵島は「例外的な離島」を形成することに成功した。

<研究計画の遂行状況>

①資料収集：所期の目標通り、奎章閣所蔵の鬱陵島開拓期に纏わる史料、1960年代における鬱陵島開発に関わる公文書、鬱陵島学校組合資料等の鬱陵島居住者所蔵の私文書などを収集した。加えて、国家記録院では、総督府文書の中から面予算、道洞港改修、公立学校関係の記録を発掘し、国立中央図書館では、『昭和八年 島行政一斑 鬱陵島』と題する未見のマイクロ資料を入手するなどの成果を挙げた。

②専門的知識の提供：当初の予定通りに、本研究に関わる韓国人研究者と面会し、研究計画の調整、研究の発展に資する意見・情報交換を行った。特に、本研究の領域に関心を寄せる、宋彙榮氏（嶺南大学校独島研究所研究教授）、姜敬恵氏（鬱陵島所在「独島博物館」学芸員）からは、資料の所在、研究方法、対面調査者の紹介において、有益なコメント、協力をいただいた。

③現地調査：大邱市で面会する予定であった李永官氏（植民地時代の鬱陵島居住者）が逝去されたため、その対面調査が叶わなかったことは残念だが、それ以外は当初の予定通り遂行し、最終的には20名程度の方々に対面調査を敢行した。特に、鬱陵島開拓時の移住者を祖父に持ち、自身も鬱陵島で生まれ育ち、日本人との混住を経験し、解放後は南面長を勤めた崔憲植氏へのインタビューは、史資料の裏付けを行うのに大変有益であった。また、改めて鬱陵島の各面庁及び郡庁と主要漁港、すべての小中学校を訪れてその発展史を調査できたことは貴重であった。

④研究の社会化：所属大学のホームページ改装の事情により、研究の成果を逐一報告者が所属する機関のホームページに公開・更新することはできなかった。しかし、所属機関のニューズレター（『NEAR News』）に2度韓国滞在記を寄稿した。また、研究の中間的成果は、報告者が韓国大邱市で主催した研究会において、「植民地朝鮮期の鬱陵島研究について」と題して発表した。さらに、研究成果の一部は、『第2期「竹島問題に関する調査・研究」最終報告書』（島根県総務課、2012年4月）に「鬱陵島友会と『鬱陵島友会報』」と題する論文を寄稿して公表した。

今後は、直近では2012年6月5日に鬱陵島で開催予定の「第3回鬱陵島フォーラム」において、「植民地朝鮮期の鬱陵島における日本人社会」と題する報告を行い、研究成果を社会に還元する予定にしている。

<留学全般についての感想>

韓国での長期滞在は、1998-1999年の大邱以来、2度目のことであったが、今回はようやく生活パターンを作ったかと思ったら、もう帰国の日が迫ってくるような、そんなあつという間の1年間であった。基本的には、朝起きたら新聞を読み、その後は資料収集に出掛けるか、個室にこもって一日中活字を追っているかの毎日である一方で、現地調査に遠出したり、酒がなければ進展しないインタビューを行ったり、できる限り多くの関連学会・研究会に出たり、時々大学のサバティカル中であることを思い出し、今後の学務のために大学訪問を行ったり……、結構忙しく動き回っていたからだろう。

ところで、滞在当初、最も驚かされたのは、物価の高騰ぶりであった。昨年早々に実施されたオープン価格制と国産信仰の賜物のようであったが、生鮮品をはじめ食品類、生活雑貨、衣類などのすべてが日本よりも高めなのには辟易した。幸い滞在中は一貫して日本円が高かったから、何とか生活することができた。大邱とソウルという地域差にも起因するのかもしれないが、食べ物が総じて甘めになっているのも韓国の変化を感じた一つである。辛いものが好きな私としては、少し寂しい気がした。

変わらないものもある。相変わらず各種公共交通機関の料金は安いし、人びとはせっかちだし、新しいものには目がない。それよりも朝鮮半島を見つめる研究者として気になったのは、あれだけ日本語を解する人びとが多い国なのに、日本で起こる現象にのみ目を奪われ、その背景を冷静に分析しようとする態度である。これには地域差がないようである。特に、韓国人研究者との対話を重ねるたびにそう感じた。もちろん、これを記すことで自分にも矢を放っていることは言うまでもない。

今回の留学での最大の成果は、私にとって韓国は未だ分からない国であることが分かったことである。「解るとはそれによって自分が変わることだ」とは、ドイツ中世史の碩学阿部謹也先生の著作から学んだことであるが、「ようやく自分なりの韓国像が固まってきたな」と考えていた矢先、それが幻像であると思知られることが滞在中に何度かあり、再構築しなければならない自分をもう一度認識できたからである。今回の留学は、朝鮮半島とそれを研究する自分自身を省察するよい機会であったが、それだからこそ、このことが強く印象に残っている。

最後に二つのこと。留学生に選抜されるか否かの面接の折、ある選考委員の先生より、私の研究が植民地時代という微妙な歴史を扱うことから、「その研究が韓国で素直に受け取られるのか？」とのご心配を頂戴した。でもその心配はありませんでした。韓国の研究者は物価に比例して良い意味で変わっているようです。

私は本奨学金に申請した当時、既に大学に就職している教員でした（しかも、応募資格の年齢ギリギリ）。また、今回の留学は所属大学のサバティカル制度を利用したものでもありました。そのことは、もちろん申請書に正直に書きましたが、それでもこのような貴重な機会を授ける「ご英断」をして下さったことに感謝致します。一応、何とか申請書に記した研究計画を無事に終えることができ、ほっとしています。



← 鬱陵島での現地調査の一コマ

海を眺めながら聞き取りを行うと、より饒舌に話してくれる気がします。



← 鬱陵島に残る日本人の生活の証。

韓国の庭先でよく見かける風景ですが、右から3番目の甕は、石見（いわみ）焼です。ちなみに、その他は韓国産の甕。



← 大田の国家記録院に資料収集に行った際、館内で独島（竹島）展示を見かけました。写真は鬱陵郵便局が独島に設置している郵便ポストの実物だそうです。